

水の共存

山添村立山添中学校 三年

福井 日菜

東日本大震災から一年が過ぎ、人々の関心がどのようにならなってきたのだろうか。あの津波の映像は生涯忘れない、忘れることができない。脳裏に焼きついている。

今年の三月十一日は震災が起きた午後二時四十六分に黙祷を捧げた。一年前のあの日、私は学校で先生から地震のことを聞いた。大規模な地震が起きたことや津波が車や家を押し流したことは信じられなかった。教室がざわめき私は隣の席の子と目を見合わせた。私はそこまではないだろうという軽い気持ちで家に帰った。

その日からニュースでは震災のことが流れ続けた。私はそれを見て本当に大変なことが起きたと知った。津波の映像を初めて見た時私は信じることができなかつた。上空から撮影された映像で見ると津波によって破壊され流されていくものは家や車、多くの建造物だ

った。その数の多さは津波の規模の恐ろしさそのものだった。私は一瞬戸惑った。しかし、家や車が流されていくことなど普通はありえないと思うとやっぱりこの津波の威力が恐ろしいものだった。私はこの映像で、初めて津波を見た。二度と見たくはないと思うほど怖かった。

その後、多くの人が避難所での生活になった。食料などには限りがありとても大変な様子がニュースなどで伝わってきた。水も自由に使えないという状況を知った時、今の自分の生活ではありえない話だと思った。水は生きていくために絶対に必要なものである。もし、自分の周りに水がなかったらと思っても想像することができない。私の周りには水があふれている。

水の大切さを改めて感じた。そして、水は恐ろしいものだとかわかった。でも、私たちは

水と共に生きていることを再確認した。

水が使えないという状況で少しでも使えた水は今まで使っていた水の何倍もの価値があったと思う。被災地の人にとってほんのわずかな水でも希望の光だったと思う。だから人は水に苦しめられ、水に全てを奪われても、水に助けられるのだと感じた。水に助けられている私たちは水の存在に本当に感謝しないとけない。私は自分の考えを変えて、今ある生活は当たり前じゃないんだと思わなければならぬ。

今の私の住んでいる場所は津波が来る場所ではないし水だって充分ある。その環境の中で常に忘れず水の存在に感謝し続けることは困難だ。しかし、その考えを捨てなければ水をを使う者として水に失礼だと思った。そして水がなくて困っている全ての人たちに失礼だ。だから、私は水が恐ろしいものだと思えない。そして、水があることは当たり前だと思わない。水を大切に水と共に生きていくことが必要だ。

そして、水のために私たちも何かやらないといけない。川や海を汚すことは自然を苦し

めることだけでなく、私たちの生活もおびやかすことにつながっていく。だから、人がよりよく生きていくためには水に感謝し、水を自分たちの手で守っていくことが大切だ。いづか全ての人がきれいできれいで清潔な水を自由に手にすることができるよう願っている。私は人々の心が枯れることなく輝き続けられる生活を、みんなで目指す社会をつくり上げていきたい。